

# 学級ファシリテーションの視点からの学級経営方法の開発

－ 教育実習を契機とした実践の報告 －

長友紀子

(奈良教育大学附属中学校)

中山留美子

(奈良教育大学 学校教育講座 (発達心理学))

有馬一彦・大谷佳子・山本浩大・辰巳喜美・成田菜津美・奥原牧

(奈良教育大学附属中学校)

Development of class management method from viewpoint of facilitation skills:  
a research during teaching practice

Noriko NAGATOMO

(Junior High School attached to Nara University of Education)

Rumiko NAKAYAMA

(Department of School Education, Nara University of Education)

Kazuhiko ARIMA, Yoshiko OTANI, Kodai YAMAMOTO, Kimi TATUMI, Natsumi NARITA, Osamu OKUHARA

(Junior High School attached to Nara University of Education)

**要旨:** 現職教員にとってもこれまでの学級経営の手法だけでは対応できない部分が現れ、学級経営の不確かさが増しているという現状がある中で、学級ファシリテーションの視点から学級経営について検討する取り組みを行い、今後の研究に向けて考察することを目的とし、実践を行なった。教育実習記録の記述と、公開研究講座への参加によって、実習生の視点の変化と思考の深まりが見られた。

キーワード：ファシリテーション facilitation  
学級経営 class management  
教育実習 teaching practice

## 1. はじめに

平成 31 年度（令和元年度）より、奈良教育大学附属中学校（以下、附属中学校と表記する）において、教育実習生および若手教員の学級経営に対する学級ファシリテーションの視点からのスキルの開発とその方法の研究を実施することとなった。今年度は初年度として教育実習生を対象に公開研修を行い、教育実習を契機とした学級経営スキルの開発にむけて実践を行った。

### 1. 1. 実践の目的

今年度の附属中学校の研究指標である「探求する子どもの学び・育ちを支える教師力の具体化」において、主体となる生徒の学校生活における基本的な学習環境を形成する場が学級である。その学級を生徒とともに形成し学級経営を行なうのが学級担任をはじめとする教師であるが、もとより学級は様々な個性のある生徒が集まっている場であることに加え、対人関係づくりの困難さやこだわりの強

さ等の特性を持った生徒の認知が進んだことなどもあって、現職教員にとってもこれまでの学級経営の手法だけでは対応できない部分があることが理解されつつある。このように学級経営の不確かさが増す中で、現職教員が悩みながら学級経営の方法を模索しているという現状があると考えられる。

附属中学校では、対人関係の構築に困難さを感じる生徒や集団での活動に関心を持ってない生徒、問題を自分ごととして捉えることのできない生徒などに対して、学級経営を通してどのような働きかけをすることが、彼らの心の成長や他者や社会と関わりながら生きることのできる人間形成につながっていくのかを考えることが喫緊の課題となっているが、これは多くの公立小中学校でも同様に抱えている課題ではないかと思われる。本実践では、現状と未来を見据えた学級経営の方法について再検討するとともに、教員志望学生の学級経営に対するスキルの開発について、学級ファシリテーションの視点をもとに実践を行い、今後の方法論の開発と実践研究に向けて考察することを目的とする。

## 1. 2. 学級ファシリテーションという方法

本実践では、学級ファシリテーションという方法を導入しようと考えた。学級ファシリテーションは、岩瀬・ちゃんによって提案されている学級経営の方法論の一つで、担任教師がファシリテーターとして学級を運営し、生徒の主體的な学びや活動を促すというものである。先行研究には、小学校における阿由葉らの実践<sup>(2)</sup>があるほか、ファシリテーションをキーワードにした特別活動の研究は近年多く見られる。

学級ファシリテーションは、信頼ベースの学級経営であるという。これは、生徒が温かい心の体力を持ち、自らやってみようと思う環境を整えていく学級経営ということである。ちゃんらは、信頼ベースの学級経営に有効なのが「ファシリテーション」という技術であるとし、以下のように示している。

ファシリテーションは権利と権利の対立が起こる教室に、良好なコミュニケーションでチームワークを育みながら、共にゴールをめざすことがとても上手な学級経営の技術です。(中略) ファシリテーターとなった先生は、授業や学級経営のあらゆる場面で、子どもたちの心の体力を温め、力を引き出し、聴き合いながら(共有)、共にゴールをめざします。その一つひとつのプロセスが、子どもたちの課題解決力を高め、互いに学び合うチームワークを育みます。<sup>(1)</sup>

学級ファシリテーションでは、教師は子どもたちと共にゴールを目指す並走者であり、最終的には子どもたち自身が学級をつくることを目指している点で、これまでの教師主導の学級経営のあり方との違いがある。平成29年告示の中学校学習指導要領解説特別活動編には、「学習や生活の基盤として、教師と生徒との信頼関係及び生徒相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること」<sup>(3)</sup>とあるが、学級ファシリテーションには、ファシリテーターである教師が温かいコミュニケーションを生むために働きかけを積み重ねるといった具体的な方法が示されている。教育実習期間は4週間という短い期間だが、その間に、ファシリテーションという具体的な方法を体験することは、教員志望学生の学級経営に対するスキルの開発に有効なのではないかと考えた。

## 2. 実践について

### 2. 1. 実践の方法

実践は、校内研修講座(令和元年6月19日)および公開研修講座(令和元年9月14日)の2回の講座を中心に行った。まず、校内研修講座は、附属中学校教員(28名)と6月実習実習生(7名)を対象に行い、次に、9月実習実習生(以下、実習生と表記する)(65名)、附属中学校教員(26名)、外部参加者(1名)を対象に、公開研修講座を行った。

2つの講座の位置づけは以下のように考えた。

#### ①校内研修講座

・経験年数の異なる教師がそれぞれに感じている学級経営の困難さとうまくいっていることを出し合うことで、コミュニケーションの標準化と現状の共有を行う。学級経営に対して教師が持つべきスキルは何かの示唆を得る。

・今後、学級経営に学級ファシリテーションの考え方を導入することを念頭に、ファシリテーター役の教員をグループに配置して、ファシリテーションのスキルを学ぶ。

・9月の公開研修講座のたたき台とする。

#### ②公開研修講座

・校内研修講座の流れをもとに、ワークショップ「クラスづくりを学級ファシリテーションから考える」を行い、実習生の感じている学級経営に対する困り感を抽出する。

・実習生が実習期間中に感じている学級経営に対する疑問や考えを附属中学校教員のファシリテーターとともにグループで共有することで、その後の実習期間中の所属学級での学びを深める。

9月14日の公開研修講座には、事後アンケートを行い、その内容を検討の対象とすることとした。さらに、実習生には、実習日誌とともに、毎週末と最終日の計4回(9月7日、9月13日、9月20日、9月30日)にわたって、「教育実習の記録(学級経営に関する記入項目)」の記録をとってもらった。この記録の記述の読み取りから、実習期間中の実習生の変容をつかむことができるのではないかと考えた。

表1 実践の流れ

	内容	対象
第1次 (6月)	・ワークショップ テーマ1「学級経営で困難さを感じる事」 ・テーマ2「学級でうまくいっている事」 ・振り返り、講評	附属中学校教員(28名) 6月実習教育実習生(7名) 計35名
第2次 (9月)	・実習生を対象にしたワークショップ「クラスづくりを学級ファシリテーションから考える」の実施 ・外部講師による講演「どの子ども大切にする教師を目指して」講師:谷口陽一先生 ・振り返り、講評	9月実習教育実習生(65名) 附属中学校教員(26名) 外部参加者(1名) 計92名

### 2. 2. 実践の概要

ここでは、9月14日に行なった公開研修講座における実習生の様子を中心に実践の概要を報告する。

公開研修講座は、校内研修講座をベースにして、ワークショップ形式で行った。全体テーマは「クラスづくりを学級ファシリテーションから考える」とし、具体的なテーマを『文化のつどいの成功』あなたが学級担任ならどうする?』とした。これは、9月28日、29日に文化のつどい(附属中学校の文化祭)を控えた時期であり、実習生の学級生徒との関わりは文化のつどいの準備の活動が中心であったため、実習生が主体的に話しやすいテーマではないかと考えたためである。実習生はAからIの9グループに分かれ、各グループに附属中学校教員が1名ファシリテーターとしてついた。グループは、学年の配属は同じで、教科は混合されるように組み合わせた。1グループの人数は7~8名となった。文化のつどいの取り組み内容が学年ごとに異なるため、このような組み方とした。実際のワークショップの流れは以下に示す通りである。

学級経営公開講座

日時 9月14日 15:30~17:30

場所 附属中学校体育館

参加 教育実習生(65名)、附属中学校教員(26名)、外部参加者(1名) 計92名

テーマ

「クラスづくりを学級ファシリテーションを考える」

表2 全体の流れ

全体説明	趣旨説明 講師紹介 谷口陽一先生(学校心理士・認知行動療法ストレスカウンセラー) 中山留美子先生(奈良教育大学学校教育講座准教授) スケジュール説明
ワークショップ(50分)	『文化のつどいの成功』あなたが学級担任ならどうする?』 ・ファシリテーター:行事を通じて学級経営を成功させるには?ということを考えさせる。失敗したらどうなるでしょうね?という疑問を入れる。一つの解を求めるものではないという認識が必要。 ・学生:テーマを出すときに、「成功」をどう捉えるか、そのために何をするといいと思うのか、についての意見が出せるように促す。
講演(50分)	「どの子ども大切にしている教師を目指して」谷口陽一先生 ・講演 ・まとめ、質疑応答

講評(10分)	中山先生より講評
---------	----------

ワークショップのグループの配置は、ホワイトボードを中心に半円を描くように椅子に着席し、ホワイトボードの横にファシリテーターの教員が立つようにした。話し合いの最中はメモを取らず、発言は全てファシリテーターの教員がホワイトボードに書き出して可視化していった(図1)(図2)。



図1 ワークショップの様子

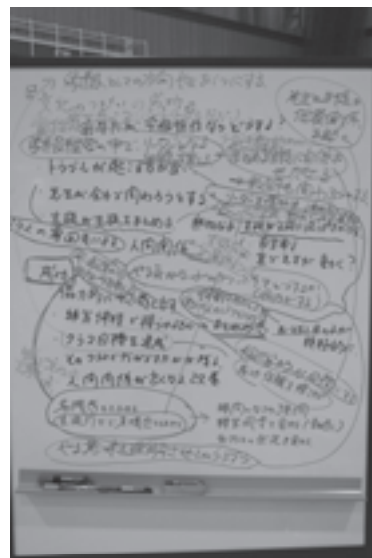


図2 ワークショップ終了後のホワイトボード

まずはじめに、ファシリテーターからワークショップのテーマを知らされると、その中の「文化のつどいの成功」をどう捉えるかというところから対話を始めるようにした。これは、「文化のつどいの成功」には様々な考え方があると予想されるため、実習生に成功の定義は一つではないことと、一つのゴールに向かって話し合いを行うのではないことを周知するために全てのグループで共通して行った。

ワークショップの当初は発言もあまり多くなかったが、ファシリテーターの促しや疑問の提示などで徐々に積極的に話をする様子が見られるようになった。

### 2. 3. 実習生の記述から

以下に、事後アンケート（図3）の実習生の記録から、話し合いの内容と実習生の考えが読み取れるものをいくつかあげ、考察を行う。

学級経営公開講座 学籍番号 ( ) 氏名 ( )

1. ワークショップについて  
 グループでの意見の交流が十分にできた ( 1 2 3 4 5 )  
 学級担任としての考え方が深まった ( 1 2 3 4 5 )

ワークショップについての感想

講演についての感想

図3 事後アンケート

『文化のつどいの成功』について深く話し合えたのが面白かった。私のグループでは、『全体の成長』と『劇（題目）の完成』のどちらを成功ととるかに議論が行きついた。教師としての願いは『全体の成長』だが、子供たちが達成感をえられるのは『劇の完成』であるという意見がでた。私は、両者は相反するものではなく相乗効果で得られるものだと考えた。教科指導の傍でおろそかになりがちだった学級についていろんな人と意見を交わして改めて考える機会になった

『成功』とは、私は、トラブルやケガがなく、みんなが協力のよさを実感し成長することができるという意味で

考えていた。しかし、それが達成できなければ『失敗』なのかという問いに直面した。私が参加したグループでは、主にそれは『失敗』ではなく『糧』であり、それを学びや成長のチャンス、きっかけとしていくべきであるという意見が出た。また、文化のつどいとは生徒の個性（文化）を生かし、クラスの文化を促進していくものであるという意見も出た。私一人では考え及ばないようなことを、ファシリテーターを通し交流することができ、私にとって良い財産になったと考える

「教師の立場と生徒の立場での『成功』とか『ねらい』の考え、捉え方が異なるということを再認識した。私たち教員のねらいは生徒が主体的に行動し、文化のつどいが成功し、生徒が成長することである。しかし、生徒はもっと単純に、うまくいった、楽しかった、という部分に成功、ねらいを持っている。両者の兼ね合いに関して、教員がどれだけ関わっていくかということが大切であり、考える課題である」

ワークショップのテーマにある「文化のつどいの成功」の定義が一つではないことをグループで考えたことで、実習生の考えの幅が広がったように感じた。教師側からみた「成功」しか考えていなかった実習生は、生徒側から考えることで学級集団への教師の関わり方を考え直すという思考の変化を見せた。「成功」の定義があったとして、では「成功」しなければ「失敗」なのか？というファシリテーターからの新たな問いかけを受けたグループでは、「失敗」は「糧」であるという捉えを生み出し、話し合いを広げていった。実習生らは、ファシリテーターの教員のサポートを受けながら、グループで様々な考えを共有し、それまで持っていなかった視点から生徒や学級集団、学級経営について考えている様子であった。

### 3. 実習記録（学級経営に関する記入項目）

学級経営に関する記入項目（以下実習記録と表記）（図4）は、実習期間中に「②学級担任として学級集団を支援するための具体的手立てを思いつきますか」の項目において自己評価が上昇したグループと、途中で上昇が止まったグループ、変化の見られなかったグループ、実習期間中を通して自己評価の高かったグループの4つに大きく分類することができた。

自己評価が下降した実習生はいなかった。ここでは、実習記録で、第1週と最終日の自己評価が5段階中2段階以上上昇した実習生の記録をあげる。記述の抜き書きは、第1週と公開研修講座後の第3週、最終日のものである。本来であれば全てのグループから記述を抽出して分析、考察を行うべきであるが、本稿では一部のみになっていることをふまえた上で、第4章で今後の展望を検討する。

教育実習の記録（学級経営に関する記入項目）

様式1. 実習初日（9月2日）

実習生氏名（                      ）自クラス    年    組

観察・反省（学級活動）  
【生徒観】

【学級経営目標】※担任の考えを聞きとる

【学級経営目標をふまえて自分が担任であれば、どのような手立てが考えられるか】

図4 実習記録

### 3. 1. 実習記録の記述から

実習生 A

自己評価 3→5

#### ・第1週の記述

「学級集団がより成長していくために、学級担任として生徒の自己有用感や自信を高めさせたいと考える。具体的には、生徒に役割を与えたいと考える。例えば、文化祭（文化のつどい）で1年生が行う合唱について全体の進捗や状態を把握し、進行を行う役割を与える。（中略）リーダーの存在をつくることで、学級の団結力を高めることにつながると考えられる。（中略）その際、多くの苦勞、失敗があると考えられる。それをサポートし支えていくことが教師としての必要な手立てであると考ええる。学級をさらなる成長につなげていくために、大きな役割を与え、それを支えていくことが重要である」

#### ・第3週の記述

「生徒の『失敗』について考える。学級の中で生徒同士の衝突や教師や生徒のすれ違いが起きてしまうことはあるだろう。そのような『失敗』にどう対応し、指導していくかが問題である。（中略）まず、一人の失敗を一人の問題で留めておかないということを考えて。（中略）次に、感情に左右されないようにするという事である。（中略）教師は生徒の健全な発育に大きく寄与する存在であるので、感情をもとに、情熱を持って接することも必要だが、『生徒の成長を第一に考えて指導していくこと』が求められる」

#### ・最終日の記述

「この1ヶ月、学級に関わってみて、学級の特徴を生かすのは教師であり、臨機応変な対応が求められることを実感した。（中略）他者、友人や教師とのぶつかり合いも多くなる。そこで、教師としては生徒の違いや変化を絶えず観察し、それぞれに合った接し方、指導を行って行かなくてはならないと考える。実習が始まった当初は、学級の色も分からず、教生としてどのような接し方、指導をしていくべきなのかわからなかった。しかし、先生方の指導を見て少しずつ手立てが見えてくるようになったと感じる。例えば、教師と生徒の線引きである。（中略）正しい授業規律を形成し、メリハリを持った関わり合いを行なっていくためには、（中略）線引きを明確にし、メリハリを持って怒るなどの指導を行うべきであると考ええる。初めは全員に好かれることを目指していたが、それが「よい先生」であるとは限らないので、広い視野を持ちながら、本当の意味で生徒にとっての「よい先生」を目指していけるように精進していきたい」

実習生 B

自己評価 2→4

#### ・第1週の記述

「私はまだクラスに入って1週間なので、この生徒に対してこんな支援が必要であるという具体的な手立ては思いつかない。クラス全体の話で考えると、男女の壁があるように感じたので、男女が気軽に話せる環境を作ることが必要だ。特に文化のつどいなどの活動では協力することでより良いものを作ることができるので支援を行いたい（後略）」

#### ・第3週の記述

「水曜日に講義で学んだように、生徒と私たち教員の“成功”が異なっているということを理解しなければならない。生徒にとって成功とは楽しむ、思い出になるということだ。私は劇が成功することが文化のつどいの達成目標だと考えてしまっていた。生徒の考えによりそうためには、まず生徒の思うようにさせてあげるのが一番だと思う。その中で、教員は多少の手助けをする。また方向性などがすれ違っていないかにも注意する。学級を一つのまとまりにするためには思い出や楽しさの共有が必要不可欠である」

#### ・最終日の記述

「基本的なスタンスとして、あまり干渉しすぎない方が良く考えているので、過度な支援はできるだけしたくない。（中略）自らで考えて自主的主体的なクラス運営を願う。ただし、全員が自己を確立し、自立しているわけではないので、そういった生徒に対する支援は十分に行いたい。（中略）なるべくクラスメイトと関わる時間が多い方が、孤立する心配がなくなると思うので、学活や総合の時間にはコミュニケーション方法の授業を行う。また、クラスの中に何人かは他人の気持ちを考え、率先して助けることができる生徒もいるので、その生徒の負担にならない程度には助

けてもらう。(中略) これらを行うための日頃からの生徒観察を行い、クラスの生徒にどのような能力があるのかを見ておく必要がある」

### 3. 2. 実習記録の記述の考察

実習生 A は、第 1 週から詳細に学級の様子を記録し考察を行っていた。所属学級では、1 ヶ月の間に生徒同士や生徒と教師の衝突などの記述に見られるような「失敗」と受け止めている出来事が起こったようである。その中で、実習生 A は、当初は教師が生徒を正しく指導するといった教師主導型の視点だけで考えていた学級経営を、より生徒に寄り添ったものに変化させている。そして、最終日の記述からは、自分なりの「よい先生」のあり方を実感的に想定することができている。

実習生 B は、第 1 週は手立ては思いつかず、生徒の観察を行なっているのみであるが、公開研修講座で学んだことから、自分の思う文化のつどいの達成目標と生徒のその違いがあるという新しい視点を手に入れ、考えを深めていった様子が読み取れる。最終日には、より具体的な学級経営の手立てを考えた記述を行なっている。

実習生らは学級生徒との関わりや、担任教員からの助言、公開講座のワークショップ等から、実習前にはなかった視点を手に入れたと思われる。公開講座のワークショップ後の実習生 B の記述に、「生徒の考えによりそうためには、まず生徒の思うようにさせてあげるのが一番だと思う。その中で、教員は多少の手助けをする。また方向性などがすれ違ってないかにも注意する」という内容が見られるが、これは、学級ファシリテーションの考え方と近いものである。実習生 B は公開講座におけるワークショップや講義でその視点を手に入れたと思われ、公開研修講座での経験が彼らに一定の影響を与えたと言えるのではないだろうか。

### 4. 今後の展望

本実践は、これからの学校で生徒の学びを支える教員となる教員志望学生の学級経営に対するスキルの開発とその方法について実践を行い、今後の研究に向けて考察することを目的としたものである。学級ファシリテーションの視点からのワークショップ(校内・公開研修)を開催し、実習生に一定の影響があったと考えられたものの、これは実習後半に単発の機会として設けたものであり、基本的に

は現在行っている教育実習から実習生がどのような学びを得ているかということを検討するところまでにとどまった。

本実践の対象となった実習生に対しては、実習前後の変化を分析する目的で、実習開始直後(1 週目の金曜日)に教師効力感尺度の調査を行っている。教師効力感尺度は春原(2007)<sup>(4)</sup>の項目を因子負荷量に基づき一部抜粋して用いた。教育学部では本年度、全学生を対象とした調査を行っており、各回生に対して前期末、後期末の2回(新入生に対しては入学時の4月をあわせて3回)調査を行う計画となっていたが、実習生を含む3回生の前期末調査を後期開始時期の10月に設定し、実習開始直後のデータとの比較を行うことで、教育実習中の学生の変化について明らかにすることを目指した。教師効力感尺度の調査については、今後、分析結果を考察していく必要があり、奈良教育大学・学校教育講座(心理学)と連携しながら、研究を進めていきたい。今年度行なった公開研修講座と教育実習の記録の内容を改善することも、研究の課題であると考え、今後の展開につなげていきたいと思う。

### 注

- 1) 本研究は、平成 31 年度(2019 年度)奈良教育大学「次世代教員養成センター・プロジェクト研究」(研究代表者:長友紀子, 研究課題:育実習を契機とした学級経営に対する教師効力感の開発とその方法の研究)としての採択を受けて推進したものである。

### 引用文献

- 1) 岩瀬直樹・ちよんせいこ(2011),「よくわかる学級ファシリテーション:信頼ベースのクラスをつくる, 1」解放出版社,pp20-21.
- 2) 阿由葉恭代・懸川武史・音山若穂(2018)「ファシリテーション技法を活用した 小学校学級活動の指導法に関する一実践」群馬大学教育実践研究 第 35 号,pp287-pp298.
- 3) 文部科学省(2017)「中学校学習指導要領解説特別活動編」pp27.
- 4) 春原淑雄(2007)「教育学部生の教師効力感に関する研究一尺度の作成と教育実習に伴う変化一」日本教師教育学会年報,pp98-pp107.